

第34期第13回研究会（第9～13・15回連続研究会）「検証ジャーナリズム 第5回 再生委行動計画を読む」（ジャーナリズム研究・教育部会、メディア倫理法制研究部会合同企画）
終わる

日 時：2015年2月27日（金）18：30～20：15

場 所：上智大学12号館4階12-402教室

問題提起者：江川紹子（ジャーナリスト）

司 会 者：山田健太（専修大学）

参 加 者：45名

記録執筆者：山田健太

*第13回の研究会は、上智大学メディア・ジャーナリズム研究所との共催

朝日新聞自身も、既存の組織や新設の委員会を設置し、報道に巣くう問題点を検証してきた結果を、2014年末から年明けにかけ相次いで公表してきました。部会では、これらの報告書等について改めてその内容について、何が議論され議論されてこなかったのかを確認する作業をすることが、今後のジャーナリズムの検証のためには必要であると思に至りました。そこで連続研究会では、「慰安婦報道報告書」「再生委行動計画」の作成にかかわられた当事者のお二人をお呼びし、問題提起をしてもらうことにしました。

朝日新聞社は上記の慰安婦報道や原発報道などの一連の「不祥事」を受けて、外部委員を含めた「信頼回復と再生のための委員会」を設置しました。そしてこれら報道検証にかかる報告書のほか、社内集会やヒアリング等を重ねて2015年1月5日、「ともに考え、ともにつくるメディアへ信頼回復と再生のための行動計画」を発表しています。パブリックエディター制度など新しい機関の創設をうたったものですが、その実行にはまだ不透明なものも少なくありません。そこで、同委員会の外部委員の一人である江川氏をお招きし、いったいまのジャーナリズムの病巣はどこにあるのか、それらへの処方箋はあるのか、などお聞きしました。

同紙は、今回の吉田証言、吉田調書、池上問題のうち、最も朝日にとって根が深いのは吉田調書報道であるとししました。それは、同報道が調査報道といえるものでもなく、しかも初めから決まった方向で記事を作っているからだとしします。配布資料として、「プロメテウスの罠」や「美味しんぼ」報道を挙げ、記者が自分でストーリーを作っているのではないかと問題提起しました。また、社内の記者との意見交換会に出席すると、その場の雰囲気は社の糾弾会風だったり、組合団交のようだったり、社員がわがこととして捉えているかどうか不安に思ったとの、エピソードも話されました。

話はその後、朝日が同時進行で3つの会議体を走らせたことの意味や、メディアにとっての第3者委員会の有用性にも広がりました。これらのテーマについては今後、第3弾として報道機関が設置する第3者機関のあり方について議論を進めていく予定です。メディア界は偶然にも、放送「あるある事件」（関西テレビ）、出版「僕パパ事件」（講談社）、そして新聞「慰安婦・原発事件」（朝日新聞社）で、それぞれ3つの外部検証機関を設置、「再生」への道を歩んでいることとなります。こうしたメディアの違いによってどのような異同があるのか、メディアにとって第3者機関とはどういう意味を持つのかなどを議論していく予定ですが、上記の2つの研究会はそのための貴重な素材を与えてくれました。